

# クモヘリカメムシ、イネカメムシの発生が多くなっています！

～斑点米発生防止には乳熟期の防除が重要です！～

**[発表の内容]**

作物名 : 水稻  
 病虫害名 : 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ, イネカメムシ)  
 発生量 : 多い  
 発生地域 : 県下全域

**[発表の根拠]**

- ① 7月下旬現在, 水田内におけるクモヘリカメムシ(写真1, 2)の10回振りすくい取り虫数(本年値1.61頭, 平年値0.31頭)は平年より多く(図1), 発生地点率(本年値12%, 平年値11%)は平年並である。
- ② 7月下旬現在, 水田内におけるイネカメムシ(写真3)の10回振りすくい取り虫数(本年値0.08頭, 平年値0.03頭)は平年よりやや多く(図2), 発生地点率(本年値5%, 平年値2%)は平年よりやや高い。

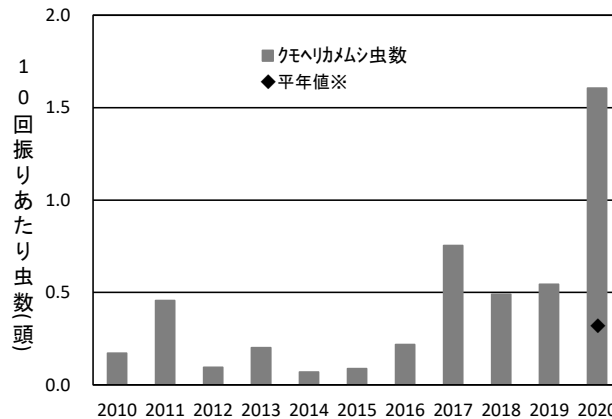


図1 水田内におけるクモヘリカメムシの発生状況(7月下旬)

※2010年から2019年までの10年間の平均値を示す。

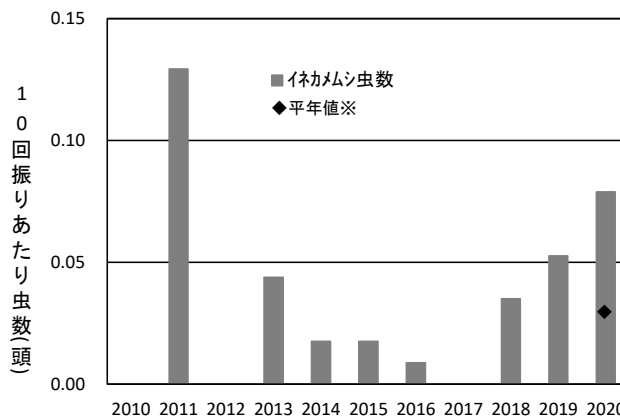


図2 水田内におけるイネカメムシの発生状況(7月下旬)

※2010年から2019年までの10年間の平均値を示す。



写真1 クモヘリカメムシ(成虫)



写真2 クモヘリカメムシ(幼虫)



写真3 イネカメムシ(成虫)

### [防除対策]

- ① 成虫を対象とした防除適期は穂揃期である。穂揃期に成虫を確認した場合は防除を実施する。
- ② 幼虫を対象とした防除適期は、出穂後10～15日頃(乳熟期)である。乳熟期以降の幼虫密度が高いと斑点米の発生量が多くなる。すでに防除を実施した水田であっても、その後幼虫がふ化したり新成虫が再飛来したりするので、発生を認めた場合は表1を参考にして追加防除を実施する。
- ③ ふ化直後の幼虫は非常に小さく、気がつかない場合があるため、水田内をよく観察する。
- ④ 周辺水田と出穂期が異なる圃場では、集中的に被害を受けることがあるので注意する。
- ⑤ 防除の際には、収穫前日数や使用回数及び周辺作物(特に早生品種を作付している水田)への飛散に注意する。

表1 稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤

(令和2年7月22日現在)

| 薬剤名                       | 使用方法 | 希釈倍数         | 使用時期     | 本剤の使用回数 | 有効成分     | IRACコード <sup>1)</sup> |
|---------------------------|------|--------------|----------|---------|----------|-----------------------|
| アルバリン顆粒水溶剤/<br>スタークル顆粒水溶剤 | 散布   | 2,000倍       | 収穫7日前まで  | 3回以内    | ジメトフラン   | 4A                    |
| キラップフロアブル                 | 散布   | 1,000～2,000倍 | 収穫14日前まで | 2回以内    | エチプロール   | 2B                    |
| MR. ジョーカーEW               | 散布   | 2,000倍       | 収穫14日前まで | 2回以内    | シラフルオフェン | 3A                    |

1) 殺虫剤抵抗性対策委員会(IRAC)により、殺虫剤の有効成分を作用機構により分類し、コード化したもの。

※ 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認する。

※ 育苗箱施用剤による防除、航空防除等を行っている場合は、本剤の使用回数ならびに有効成分の総使用回数に十分注意する。

※ ミツバチ被害軽減のため、ミツバチの活動が最も盛んな時間帯(午前8時～12時まで)の農薬の散布をさける。